

平成 30 年度第 4 回滋賀県協働プラットフォーム 議事要旨

1 日時

平成 30 年 7 月 11 日 (火) 10 時 00 分から 12 時 00 分まで

2 場所

滋賀県大津合同庁舎 7-A 会議室

3 テーマ名

ユニバーサルデザインの取組の推進について
～心のバリアフリーを進め、助け合いのまちづくりをめざして～

4 参加者

(1) NPO・関係団体等関係者

滋賀県身体障害者福祉協会
滋賀県脊髄損傷者協会
アイ・コラボレーション
オフィスゆうき
滋賀県社会福祉協議会
滋賀県社会福祉士会
滋賀県手をつなぐ育成会
びわこビジターズビューロー
公募



(2) テーマの提案者

滋賀県 健康医療福祉部 健康福祉政策課

(3) 県関係各課

滋賀県 県民生活部 スポーツ局
滋賀県 健康医療福祉部 医療福祉推進課
滋賀県 健康医療福祉部 障害福祉課

(4) 事務局

滋賀県県民生活部 県民活動生活課 県民活動・協働推進室

5 協議内容

(1) テーマ提案者から提出理由・趣旨を説明

○最初にバリアフリーとユニバーサルデザインの違いについて、バリアフリーというのは、例えば階段とか、通行の障害とかを取り除くこと、ユニバーサルデザインをもう少し簡単に言うと、元々

そのバリアを除いた状態で物事を計画したり、設計したりすることで、障害のある人等のいろいろな事情がある人のことを踏まえて、最初から計画したり設計したりするということ。

その考え方を取り入れるために、平成16年に「誰もが住みたくなる福祉滋賀のまちづくり条例」をはじめ、行政も県民も一緒に進められるように、「淡海ユニバーサルデザイン行動指針」を策定して、施策を進めてきたが、だんだん内容が古くなってきている。

今般、国では、2020年、2年後の東京オリンピックパラリンピックの競技大会を契機に、心のバリアフリーの分野とまちづくりの分野をする推進するため、「ユニバーサルデザイン行動指針」を作った。今年5月には、バリアフリー法の一部改正があった。障害のある人の意見を伺い、それを施策の中で評価していくということが盛り込まれた。具体的には、これから1年かけて、細かな点が規程されることになる。

東京オリンピックパラリンピックの4年後の2024年に、滋賀県で国体・全国障害者スポーツ大会が開催される。現在、その準備が本格化しており、取組を進めているところ。

2024年を目指して、滋賀県も県民全体でユニバーサルデザインをもっと進めていきたい。

障害のある人もない人も、男性も女性も、若い人も高齢の人も、全ての人がお互いに助け合って心のバリアフリーを実践できたらいいと考えている。

皆さんの取組を少しずつ積み重ね、その取組でいいなと思うものを、皆さんと一緒に発信できたら、小さな流れも大きな流れに変わるということもあり、そのような期待を込めて、今日お集まりいただいたところ。

誰もが、少しの配慮で実践しやすい取組、いろいろ考えられると思うので、皆さんの経験とか、こんなことがあったらいいなと思うことをぜひ教えていただき、また、こんな課題があるということもぜひ教えていただきたい。

少子高齢化、労働力、人口の減少、地域のつながりが課題になっている。個人だけでは解決できない課題がたくさんある。生活困窮とか認知症、近所のトラブル等。国の方では、地域共生社会の実現、高齢者、障害者、子どもをはじめ誰もがお互いに支え合う社会の実現に向けて施策を進めている。

1億総活躍社会の実現、これも誰もが生きがいを感じられる社会づくり。

国の法律改正等もあるが、心のバリアフリーを進めるには2つの視点があり、まず、ハード整備が進んだとしても、皆さん一人一人の心が変わっていく、気づきが出来ていくというのが一つ。次に、ユニバーサルデザインのまちづくり、バリアフリーから改築するときには、初めからユニバーサルデザインにしていくという視点がある。

滋賀県は、「国連の持続可能な社会の実現可能な開発目標（SDGs）」の実践に取り組んでおり、その中で、誰一人取り残さない社会の実現を目指している。そのためには、全ての人に居場所と出番が必要であり、少しの配慮があれば活躍できる可能生があっても、様々な理由があってそこまで進められていない状況がある。

このような状況を踏まえ、少しでもよくするための施策を検討したいと考えている。例えば、①ユニバーサルツーリズム。誰もが好きな時に好きな場所に行ける仕組みづくり。

②様々な人が意見・評価を行う仕組みづくり。これは、障害のある人、子ども、外国人が地域で普通に暮らしていくため、今まで、声を聞かずに制度設計が進められてきたが、色んな人の声を

聞いて進めていくこと。そのためには、会議のコーディネーターも必要だと思う。

また、滋賀県でもパーキングパーミット制度があり、障害のある人や、配慮が必要な人が優先的に駐車場に停める際、マナーアップを目的に、車に札を掲示することで周囲の人に配慮が必要であることに気づいてもらい、マナーアップを進める制度がある。

③わかりやすい情報が得られる仕組みづくり。車椅子利用可能な店、地域のバリアフリーとかユニバーサルデザインが、一目でわかるような冊子とか地図、支援していただいている事業者リストがあるといいと思う。

④ユニバーサルデザインの考え方を理解し発信する仕組。いくらいい取組があっても、一部の人だけで終わっては残念なので、もっともっと広めていく。マナーを広めていく講師とか、すばらしい事例を積極的に県も含めてみんなでPRしていく。

皆さんから、まず課題を教えていただき、こんなことができたらいいなということもぜひ教えていただきたい。

(2) 対話・協議の内容

○様々な社会背景、さらに、東京オリンピック、国体・全国障害者スポーツ大会、それからSDGsがあり、今後ユニバーサルデザインを推進するに当たり、一つの大きな機会、推進していく機会にはなると思う。

ハード・ソフト両面があるが、今日のテーマに関連して、皆さん、まずは、現状、取り組んでいる課題を聞かせていただきたい。

○こんなことがあったということで、二つ、お伝えしたいと思う。一つは、車椅子で押して介護をしている時、外に出ると、車椅子の目線ではトラックの排気ガスが顔にかかってきて、それだけで気分が悪くなる。タイヤが近くて、目線が違うので、怖い。車は外出に便利だが、怖いもの、危ないもの。また、駅や病院とかで、足腰が丈夫な方、元気な方でも、乗り降りに一番しやすい所・出入が近い場所に駐車し、乗り降りに時間のかかる高齢者・障害者の方は、かえって少し遠いところに駐車しているが、むしろそのような方々が、より出入りが近い場所に駐車できると思う。

元気な方はちょっと頑張っ、時間のある方は歩いてもらうとか、ちょっとした配慮で社会が変わっていくと思う。

○非常に大事な視点、やっぱりこう余裕持って、考えるというか自然に行動できればいいと思う。

○2013年くらいから、高齢者・障害者が旅をしやすいよう、取組をしている。まず、フリーペーパーやホームページで、県内の観光地や店の情報を発信している。階段やトイレの情報とかである。

また、旅行の相談窓口を目指している。ここへ行きたいという人の情報をもらい、観光地やホテルに伝えていけるよう、準備をしている。

神戸等では、ホスピタリティ研修、どうやってサポートしたらいいのかを学ぶ研修をしている。そういうことを観光地やホテルの人に伝えていけたらと思う。

例えば、お風呂だけの介助が必要でも、介助者が同行して旅行をすると、旅費が2倍になるが、これには現状で障害者支援を受けられる状況ではない。神戸では、2年前から、お風呂の2時間

だけとかにヘルパーをお願いできるようになっており、滋賀県でも、少しずつでも同じようなことができるようにしていきたいので、協力をいただきたい。

○神戸の事例は、地に足をついた取組をされていると思う。

○大手のサイトでも、バリアフリー対応とか書かれていても、実際に行くと、段差があったりすることがあり、写真等の情報が少ないと良くわからない。

バリアフリーというイメージは、人それぞれ認識が違う。予約時、電動車椅子であると伝えるが、電動車椅子と手押しの車椅子との差をイメージしてもらえず、実際に行くと大きさの違いに驚かれる。出会がないと、電動車椅子をイメージしてもらえていない。また、飲食店では券売機が増えていて、メニューのみの表示ではイメージしにくく、写真があるとわかりやすい。視覚的に理解できる情報が大切だと思う。字体も含めて。

舞台に出演することがあり、障害者が出演するというのは想定されていなく、楽屋や通路が狭くて、荷物があつたりして、電動車椅子が通れないということを他の出演者が気づいてくれ、荷物をどけてくれたりしてくれる。

関わる機会がない他業種の方とかは、どうしたらいいのかわからないという方もいる。障害者の方からも、電動車椅子と手押しの車椅子の違いとかも、具体的に、もっと伝えていく力が必要だと思う。

○例えば、車椅子が必要な方、介助がないと外に出歩けない方で、ちょっと車椅子押してくれるような人がいると、もっと社会に出て行きやすい。そうした当事者が社会に出ていくと、周りもその人たちを認識し、地域の福祉の力が底上げされていくと実感する。

当事者が自由に外に出て行けるような社会になってほしいと思う。ケアマネジャーの仕事をしている時、制度が壁になっていると感じる。例えば、ヘルパーさんは、生活に必要であることが条件で、図書館に行くときに趣味の本を借りるなら利用ができない。もっと、介護保険の制度が柔軟になって、趣味であってもヘルパーさんを利用できれば、かえってそのほうがいろいろな面で地域の福祉力が上がるように感じる。制度が壁になるということを知ってもらいたい。

○情報発信は、両方からの発信が必要だということ。視覚情報というのは大事だし、これから工夫の余地があると思う。

○発達障害とか知的障害っていうのは、本当に見た目ではわからなくて、誤解をされるため、ヘルプマークという周知活動をしている。

今年度から、町内の学習会や人権学習会で、知的障害や発達障害の疑似体験研修をしており、説明体験をしている。障害を持つ親でも、初めて本人の感覚を体験し、子どもの大変さを実感したという声があった。

できたら、小さいうちから、障害のある人ってどういうふうな感覚なのかというのを学んでいただきたいと思い、教育関係のところで、疑似体験を進めてもらうよう活動を始めたばかり。

○社会人になってから、仕事を通じてうつ病になって精神障害者となったが、そういう立場で現状に対する課題というと、まず、途中から障害者になった人間が、どのように社会とか行政とかに助けを求めていったらいいのか、よくわからない。

あと、精神障害者同士のふれあいとかつながる場が少ないと思う。

過去に、社会福祉法人の職員とかもやっていて、知的障害者とかは学校のつながりがすごく強

くて、同窓会とか年2回ペースで開くとか、途中から障害者なった者として、同じ立場の人とながれる場が少なく、そういった場を行政の方でもつくっていくとか、障害者が政策決定をする場に関わっていける場をもっと増やしていただきたいと思う。

滋賀県も身体障害者に対しては専用の職員採用枠があるが、精神障害者に対してはないというのが現状。

法定雇用率も上がりましたし、精神障害者の雇用義務も、新しく発生しているので、県とか地域の自治体が、精神障害者の雇用枠をつくるのではないかと期待していたが、そうではなかった。

障害者が、障害者に関すること、それ以外のまちづくり等の行政施策について、意見が言え、評価できる仕組みが欲しい。

一般企業に対して、障害者雇用の推進なども進めてほしいと思う。一般企業へ就職活動したが、求人・給料は少なく、うつ病の方は対応できる用意がないということで断られた。企業に対する啓蒙、教育も必要と思う。普通の人が普通に働けないと、障害者に仕事も回ってこない、お金も回ってこない。

○就職面接の段階で、障害のある人は通らないっていうことを言われたっていう相談を受け、それは障害者虐待、使用者虐待に当たるのではということで、県の障害担当の方と一緒に同行して面談などをしたことがある。

今は、バリアフリー法が話題であるが、差別解消もあり、虐待の問題もあるし、心のバリアフリーまだまだ全然進んでないと思う。

つらいことを経験された当事者、相談を受けた相談員、家族の意見というのも、施策に取り入れていく必要があると思う。

○心のバリアフリー推進を考えてみたが、大阪の大国町の駅から、全盲の友人と二人で守山駅まで帰るとき、肩を貸して誘導していたが、車いすのタイヤに杖が引っ掛かるため、声を出して誘導していた。人も多くて、点字ブロックの上を通るようにしていた。ところが、点字ブロックの上で立ち話していたり、荷物があつたりして、悪気はないと思うが、何のために点字ブロックがあるのかを気づいていない。車椅子なので、駅でスロープの介助を頼むが、全盲の方へのちょっとした誘導とかもあればいいのなと思った。車椅子なので点字ブロックを避けていたが、全盲の方と一緒に行動することで、感じる事ができた。

これって、心のバリアフリーかなと思った。ホームの点字ブロック内側にある白い線は、これを目標に歩くと、ホームから落下しないという線というのを教えてもらった。いい経験をした。立場を越えてお互いに、知ることができてよかった。そういう意味で、啓発が必要なのかと思う。

○教育っていうのがやっぱり大事なんかなという感じがする。経験して、いろんな立場のことを幅広く理解していく、それが自然にできていくとすばらしいなと思う。

○先ほどの話はとても大事。一般の人は、障害者をどうサポートしていいのかわからないと思う。障害によって、必要とするサポートが違う。また、一人一人、必要とするサポートも違ってくる。

今後、国体・全国障害者スポーツ大会で、滋賀県に来られた方が、楽しかったと思ってもらいたいと思う。

○障害があるからこそ見えてくる視点があり、健常者が障害者と接しているとよく見えてくるという場数の部分があると思う。

情報誌にバリアフリー対応と書いてあっても、スロープはあるがエレベーターがないという例があるとのことで、障害者が求めるバリアフリーの要素を十分情報として盛り込めていないということに気づきがあったと思う。

先ほどの駅員が、電車とホームをつなぐスロープをかけてくれる話の中でも、一緒にいた視覚障害者の方に肩を貸す等の配慮があれば、なおよかったと思う。

担当業務でスポーツボランティアをしているが、様々なスポーツイベント、今後のオリパラや国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会では、障害あるなしに関わらず様々な方が来られるので、様々な支える視点が必要で、大会運営を支えることはもとより、障害のある方情報保障等にも対応する必要があると思う。また、そういうことを支えるボランティアを、今後、確保・養成していきたいと思う。

障害者が、障害者を支えるという視点では、障害者だからこそわかる目線があり、障害者への配慮、支える力が出てくると思う。単に健常者が障害者を支えるだけでなく、障害者が障害者を支えるようになっていけたら、みんなでみんなを支える社会が実現でき、心のバリアフリーが実現できると思う。

皆さんの話を聞いて、元々心に障害がないというか、心のユニバーサルデザイン、そういうところを到達目標として目指すべきだと思った。

○皆さんの話を聞いていると、何が障害で、そうでないのかというのは、単純ではないところがあると思う。例えば、障害者を支えることは、健常者よりも障害者の力が生かされる、発揮できる部分がたくさんあると思った。

○2024年滋賀県において開催する全国障害者スポーツ大会は、全国から3000人を超える障害のある選手が滋賀県へ来られる。身体障害の中でも、肢体不自由の方、視覚障害の方、聴覚の方等と来られるし、あと知的障害の方、精神障害の方、いわゆる三障害の方が、たくさん来県される。また、選手以外にも、監督の方、観客の方も障害のある方がたくさん来県いただくことになると考えている。絶好の機会と考え、6年後の大会が障害者理解につながる大会となるように、県の方で進めている。

ボランティアでよく障害者のスポーツ活動に携わっており、思いやりとか配慮という観点で思い出したことがある。

一点目は、彦根の陸上競技場で練習会があった時、肢体不自由の選手・コーチがたくさん来られ、車椅子優先区画の駐車場が埋まってしまった。その後、来場された車いすを使用されているコーチは、乗ってきた車を少し離れた一般の駐車場へ駐車され、車椅子優先の青色の札を貼っていた。しかし、高校野球の開会式と重なったため、駐車台数が多くなり、そのコーチの隣の区画にも駐車をされてしまった。この青色の札があるということはどういう意味なのかをわかってほしかったという思いがあった。私自身、車椅子の方は移動が困難だから、出入口に近い所に優先区画を設定されていると思っていたが、それに加えて車のドアをかなり開いて運転席に乗り込まないといけなくて、駐車区画が広くないと乗り降りできないということに初めて気づかされた。この青色の車椅子優先区画が何のために必要なのかということも多くの方が理解していれば、一般の駐車区画で横の車が青色の札を下げているから、ちょっと間隔を開けて駐車しようとか、そこは避けようとかちょっとした配慮ができるのではないかと感じた。

二点目として、先週末の朝にジョギングしていたら、あるおじいさんから呼び止められ、見ると、別のおじいさんが信号の前で立ちすくんでいた。話を聞くと、自分がどこの家に帰ったらいいのかわからないと。恐らく認知症かと思うが、困っておられて、呼びかけてくれたおじいさんと共に警察に連れていき、事なきを得た。対面で接している中では、障害者手帳を持っているかどうかではなく、ただ単に困っておられるから、助けるのだと思う。障害者だけでなく、単純に困っている方に対して、多くの方が助けていく、助ける手助けをしたいなと思っていただけるような、世の中になればいいと思う。

○車椅子使用者の利用証制度の利用証発行の事務を担当していて、優先区画の方に元気な方が駐車されていて、本当に必要な方が駐車せずに困っている人がたくさんおられる。また、外見では歩行に配慮が必要というのがわかりづらい方に対して、「障害者手帳を持っているか」とか、「そんな所に駐車していいのか」という、傷つくような言葉を言う方もいると聞いている。

まだまだ心のバリアフリーというのが進んでないというのが現状で、県として周知を図らないといけないと思うが、なかなか有効なPR方法等は見つかっていない。

今後は、利用者さんの現場の声を施設管理者さんと意見交換できるような場を設けていけたらなと思っている。

○今の2人の話聞いていて、民間の力って大きいなと思う。

例えば、日本語がわからない外国人がいて、その雇用者である会社の人事は安く通える日本語教室を知っているが社員まで情報が伝わっていないことがある。生活の場、民間の場、具体的にはスーパーマーケット・図書館等で掲示物があれば、一人一人に情報が行き届くと思う。会社の人事の人だけに頼むだけでなく、いろんな所にチラシを置くようにすると、情報をもっと伝わると思う。

障害とは違うが、トイレがすごく近くなって、外に出られない、年金生活でお金がないから外に出ていくのを控えてしまう、という課題を持つ方もいることも知ってもらいたい。

○困っている方がいたら、自然に助けられるというのが大事だとおっしゃっていて、いろんな民間の立場でもいろんな手段で進めていけるような方法がたくさん出てくることが大事だと思った。

○10年近く前に全国障害者スポーツ大会に何回か出場した。生まれつき障害があって電動車椅子に乗っているが、意外と自分の障害と異なる視覚障害者等に関わる機会がなかった。その時、支援者がいなくて、自分たちだけで移動する際、移動経路の様子を説明すれば視覚障害の方はイメージできたりとか、聴覚障害だと筆談したりとか、それぞれができる範囲で行うことで、カバーできることがあると気付いた。

お弁当が配られても、視覚障害の方は何？となるけど、説明するのはけっこう難しい。

いかに視覚情報に頼っているかということを感じた。自分の思っている当たり前は、当たり前ではないということ。意外と異なる障害者同士の接点がないので、スポーツ大会を通して、当事者同士も含めて理解が進むといいと思う。なので、滋賀県で開催されるということは、うれしい。

○いいご提案だと思うし、いろんなお話聞いて、皆さんすごく前向きに考えおられ、刺激を受けている。

○以前、障害者の生活保護運営委員をやっていて、生活保護を受ける知的障害の方が多かったが、ちょっとしたサポートがあることでかなり自立した生活ができた。また、反対に、知的障害の仲間から、食事を手伝ってもらったこともある。障害者同士の支え合いがとても大事。

困難なことは、どんな人でも持っていて、ある意味、みんなが障害を抱えている中で、お互いができること、行政ができること、民間ができることがそれぞれあり、みんなで取り組んだ方が心のバリアフリーが進むと思う。僕自身も大したことはできないが、できることをやっていきたい。

○何回か発言があつとおり、障害者同士が支え合うというのは、非常にわかりやすく伝える力というのはすごく大きいと思う。

一人一人、障害があっても無くとも、お互いに支えあっているということについて、誰にでも理解もらえると思う。すごくインパクトがある。今日の話の中で、一つ得られたことかなと思う。

○ヘルプマークは障害福祉課で作っていて、ストラップ型で鞆からつりさげるようになっている。内部障害や知的障害の方など見た目ではわからない障害者がたくさんおられ、電車の優先座席に座っていたりして周囲から冷ややかな目で見られることがあり、そういった方が援助や配慮を必要なことがわかってもらえるよう、平成29年4月から滋賀県において導入している。このマークを見かけられたら、困っていることはありますか？という声をかけたり、思いやりのある行動をするようお願いしたい。

まだ、周知が進んでない現状があり、今日の話聞いて、もっと民間の力を活用した周知活動をしていけたらと思う。心のバリアフリーや、思いやりを持って行動することは、をもちろん大切だが、障害者差別解消法という法律が既にあり、行政職員としては、障害者への合理的配慮というのは行政職員には義務付けられている。できたらするのではなく、行政職員として業務を行う際にはしなくてはならないという意識を持って、配慮をしていただきたい。

○今朝、NHKでヘルプマークに関するテレビ番組があった。一生懸命啓発されているが、視聴者からヘルプマークを出すことで、逆に、攻撃されてしまうのではないかという心配があつて出せないというファクスがあった。いろいろと制度も改善されているし、ハード面でも大変良くなってきているのは感じるが、まだまだ障害者に対する理解が進んでいないというのを痛感した。

皆さんの意見を聞いて、相手を思いやる心がいろんな人を助けるのを感じた。今、西日本豪雨で被災され、多分避難所でも多くの障害者が困っていると思うが、緊急時は、他人のことを考える余裕がなくなるが、そんなときでも、心の余裕を持って、相手のことを思いやれるような社会を目指していけたらいいと思う。

先に、違う障害を持つ方と、交流することで、改めて相手の障害内容、自分ならこんな支えができることということに気づいたとい話があった。各市町の障害者団体や県内の様々な団体は、会員の高齢化と減少が進み、そういう団体に属さない障害者が非常に増えている。違う障害を持つ方と出会う機会って少なくなると思う。そういう団体に入って、さまざまな方と交流する機会を増やしていけるようになればいいと思う。協会の青壮年部活動で、いろんな障害の方とそれぞれ相互理解を深める活動や、県からの委託事業だが、身体も精神も、知的も含めた社会参加推進協議会で、いろんな事業に取り組む中で、相互理解をしていく活動している。

いろんな所で障害者が、他の障害に対する相互理解が進む機会が増えたらいいと思う。

○一つの目として、制度が柔軟に使えるようにしていただきたいと思う。先ほどの介護保険の例のように、趣味だからできないとか、当事者がもっと外に出ていけるように制度を運営する側としてより幅広い形にしてほしい。例えば、新しい条例をつくる際には、そういったことを後押しできるように制度の柔軟な運営をお願いしたい。

次に、情報が得やすい社会づくりであってほしいと思う。企業向けに伝えても、必ずしもその企業全体に伝わるわけではない。例えば、生活の場、スーパーや駅、民家の壁等に広報するだけで、今までとは違う人へ伝わると思う。幅広い形で、いろんな情報を発信し、得やすい環境をつくっていただきたいと思う。物事を知るだけで行動が変わってくる。

最後に、駅の使いやすさが向上すれば、いろいろ移動が非常にしやすくなるなど感じた。例えば、全てやるのは難しいが、駅員さんがちょっと英語しゃべれる、ちょっと手話ができる、ちょっと福祉について理解があるだけで、そこに住む人たちの移動が劇的に変わると思う。駅の使いやすさの向上、車の乗り降りも含めて、できていければいいと思う。

○なかなかまとめきれないが、まず、情報とか経験とかいうこと、また、視覚的に表していくことは非常に大事という話があった。

それから、精神障害の関係で疑似体験の取組をしているとか、ヘルプマークの取組とか。しかし、逆に、そういうことがバッシングに遭う場合もあるので、そういうことがないような社会を築いていきたいという話もあった。

また、つながりという面では、途中から障害者となった場合における制度的なことやいろんな方とのつながりの場とか、それから、雇用の問題というお話もあった。障害者を支える視点とか、今後の障害者のスポーツ大会に向けてについて、また、行政の方もいろいろ話があった。

すごく内容が濃くて、皆さんの話を聞いて、たくさん刺激を受けた。これからも、いろんな機会に発言いただきながら、いろんな方に伝えていっていただきたいと思う。それをできるだけ、行政の方でも、取り組めることは、ぜひ、また、取り組んでいただきたいと思う。

非常に有意義な話であった。それぞれの担当課の方でも、また、こういう機会をつくっていただけたらと思う。

○みなさんありがとうございます。まず、ここに、皆さんに来ていただけること自体が大変すばらしいと思う。心のバリアフリーは難しいと思うので、来てもらえるのかと思っていたが、こんなにも集まっていただき、それを自分の経験なり自分の事情を正直に真っすぐ話していただいたことについて、すごく心に響くことばかりであった。

まとめるということは、なかなか難しい。皆さん一人一人の意見なり考え方をしっかりお聞きし、忘れないようにしたい。

滋賀県は、ユニバーサルデザインを進めるに当たって、ユニバーサルデザイン行動計画を策定している。

皆さんがおっしゃるとおり、もちろん行政が頑張らないといけないが、ただ行政だけではなかなか進まないの、民間の力、それから、個人の力が必要で、それを支えていただくのは、障害のある人、ない人、それからいろんな事情を持っている方、そうでない方、みんな一緒になって支え合う、それがスタートだと思う。

まずは、いろんなところで交流の場を作る。そうすることで頭ではわかっていたけど、やっぱ

りわかっていなかったということがたくさんあると思う。

今日はいろんな面から、いろいろな心の叫びを教えていただいたので、是非、この今日の会議を有効に活用させていただき、滋賀県の施策を進めていきたいと思う。

行政はなかなか進まないが、皆さんの声をしっかり踏まえて、これから、施策を進めたいと思う。

(終了)